

青森県域における縄文時代の石器集中について

齋藤 岳*

はじめに

東日本を中心に縄文・弥生時代の竪穴建物跡内外に剥片等の石器が集中する例が知られている。全国的な状況は原材収蔵のデポとして記載された田中英司の論考に詳しい(田中 2001・註1)。剥片集積遺構の名称も使用されているが、本稿では剥片(及び碎片・二次加工剥片等を含む)が視覚的なまとまりを持って発掘調査者・報告者に認識されたものを「剥片集中」という名称で統一して記載する。また青森市新城平岡(4)遺跡のように異形石器や両面調整石器が竪穴建物跡の床面やピットから集中して出土する例もある(青森市教委 2012)。そのため、剥片に加えて他の石器の例(「石器集中」)も加えた。

「集中」とする数量は、基本として3点以上とする。

本稿の第一の目的は、青森県域の石器集中出土例を集成することである。

石器集中を発見した調査担当者が、労力や時間をかけることなく類例の存在を知り、① 調査遺跡との距離的な遠近、② 帰属時期の異同、③ 解釈例、④ 参考文献を検索可能な状況にするために表1を作成した(註2)。

第二の目的は、集成から時代性と地域性を明らかにすることである。

集成の結果、青森県域では時代性としては、竪穴建物跡出土例では縄文時代中期中葉と中期末葉の例が多い。縄文時代後期にも多く香炉形土器や完形の有縁石皿などを伴う例がある。石器集中は石材産地から消費地まで広くみられる。全体としては、遺物が多く残されている竪穴建物跡に多い傾向がある。石材産地では、竪穴建物跡の内外、土坑、フラスコ状土坑内からの出土など、出土状況の変異が大きいことが指摘できる。

第三の目的は、石器集中をもとに石器の流通について考察を加えることである。阿部朝衛(2007)により、その有効性が記されており、秋田県内では吉川耕太郎(2012ほか)により研究が深化している。集成の結果、石材原産地の遺跡では可変性のある両面調整石器の石器集中例がみられ、石槍は尖端部の作り出しがなされていないものが多い。結果として、使用時までの、特に流通途上での尖端部欠損のリスク回避がなされている。磨製石斧は、産地・消費地ともに刃部の欠損回避が意識されている。製作用具の多面体敲石と未成品が石斧石材産地から離れた場所で一括出土する例も確認できた。

1 東北地方全体と青森県域における剥片集中等の研究史

東北地方では、阿部勝則(2003)が紹介するように、岩手県盛岡市湯沢遺跡の報告書(岩手県埋文1978; 1983の遺物編で接合資料紹介)で、竪穴建物跡内の剥片集中を「貯蔵剥片」と位置付けたことが研究の出発点であろう。その後、盛岡市桜松遺跡では浅い土坑を埋めるように877片の剥片が出土し、接合資料が29個体得られた(岩手県埋文 1982)。写真と実測図が提示され、剥片の属性が報告された。そして石材の珪質頁岩が遺跡周辺や遺跡に近い零石川と黒沢川ではなく、零石町西部の奥羽山地から運び込まれたという石材流通に関する重要な記載がなされた。研究当初に剥片集中から、良好な接合資料が得られたため、縄文時代の石器製作技術の解明に関する部分で研究が進んだ。それは剥片の計

*青森県埋蔵文化財調査センター

測部位、接合資料の読み取り方法、記載の際の用語が旧石器時代の研究事例により整理されていたためであろう。一方、剥片集中自体については、その意味、そして流通については産地情報の不足もあり、適切な問を立てるのは難しかったのかもしれない。珪質頁岩と黒曜石の性格の違い(吉川 2014)が背景にあったと考えたい。関東・中部地方の黒曜石については産地の限定性は明確であり、原石は良質であっても概して小さく、主に石鏃の素材となった。そのため、剥片集中や原石の出土から流通の研究が進展した(長崎 1984・大工原 2008など)と考えたい。

そうした中でも、宮城県小梁川遺跡・大梁川遺跡の事例(宮城県教委 1987・1988)では、珪質頁岩の山形県域からの広域流通が記載されている。集積した剥片の中では、良質なものから選択・使用されていく。その結果として、質の良くない剥片が残されると推定するなど、竪穴建物内での剥片の管理についても踏み込んだ記載がなされた。

縄文時代草創期の宮城県野川遺跡の事例では、近接する2基の土坑から石器が一括出土した。両遺構の石器接合資料によって、時間的に近接することをとらえたうえで、石器の内容と性格の違いが言及された。集中する剥片は、中央では水平で、中央から離れると斜めになり、壁際が直立することから、樹皮もしくは獸皮など袋状のものに入れられていたと推察された。出土した両面調整石器は、原産地において余分な部分を除去し、半製品に仕上げることで、移動に際しての運搬コストの軽減が図られたと考察されている(仙台市教委 1996)。

剥片集中の集成については1990年代後半から行われるようになる。

福島県域での事例を集成した植村泰徳(1997)は、剥片主体と碎片主体の物に区分したうえで、集成を行った。竪穴建物内での剥片集中例については、縄文時代中期後葉から末葉の事例が多く、複式炉の盛興する時期と符合することが注意された。

岩手県域では阿部勝則(2003)による集成が行われた。岩手県域例も竪穴建物内の剥片集中は中期末葉の大木10式前後に8割が集中することを明らかにした。建物跡の奥壁付近に集中地点が多いことから、炉を基準として建物跡の平面図に中軸線を引き、剥片集中の位置の傾向性を見ようとした。また、遺跡全体の石器の中に、一括出土した剥片の位置づけを考えること、アスファルトや石棒の共伴事例に注意すべきことを記載した。

その他に、発掘調査報告書の中で石器集中の類例としての記載が断続的に続いている(註3)。

青森県域では縄文時代中期末葉の八戸市新田遺跡の報告書で剥片集中について斎藤慶吏が集成を行っている(斎藤 2006)。青森県域では縄文時代中期から後期の事例が多く、日本海側の津軽地方に少なく太平洋岸の八戸市周辺に多いことが記された。宮城県小梁川遺跡の分析を参照し、新田遺跡例の帰属時期である中期末葉は石器・石材流通の画期であることが着目された。

さて、植村は剥片集中を竪穴建物への儀礼として問題提起する(註4)。同時に「主観的な要素を多分に含み詳細な根拠を欠く結果となってしまった」と記載した。阿部勝則も、論考の終わりに「調査・整理の方法や課題が明確でなかった」ことにより議論が深まらないとする。剥片集中という事象に対する適切な問をたて、答と客観性・再現性を保つ根拠を示すことは難しい(註5)。

その中で、鹿又喜隆(2010)は宮城県野川遺跡の二つの土坑内石器集中を石器使用痕の違いから、異なる作業で用いられた石器を収納した道具箱と認定した。さらに石器を袋に入れて運搬した際に生じたと推測される微小剥離痕や光沢・摩滅を、実験で追試した。

2000年代以降には、剥片集中の性格について、参照できる考えが提起されるようになっていた。例えば堅穴建物内の剥片集中について、片付けを含む石器の管理(阿部朝衛 2007)の考えを適用できる。原石採取等が困難になる冬場への備え(吉川 2014・大場 2014; 註6)などの見解を参考することにより、多くの事例が合理的に読み込めるようになった。それらの考えの背後には技術的組織や動作連鎖、民族事例があると考えられる。

根拠としての強弱を超えて、多くの人の生活感覚・実感と合致し、普遍性のある、穩当な考え方と思われる。

その間に、新潟県獅子舞岩の半透明頁岩(阿部朝衛 1997・秦 2007; 註7)、秋田県上白川遺跡群(吉川 2012)など優秀な珪質頁岩産地が確認された。後者では、石材採掘坑が発見された。上質な珪質頁岩は、産地が限定されることが判明してきた。すでに、縄文時代中期末の石刃の流通研究(會田 2000など)は行われてきたが、珪質頁岩製石器の流通研究が活性化してきた。

そして、青森県域では蓬田村山田(2)遺跡(青森県教委 2009~2011)で、石器製作関連資料が出土状況を含めて丁寧に報告された。多数の接合資料が得られ、石器集中も多く記載されている。青森県域においても、珪質頁岩の流通について石器集中から考察できる環境が整ったといえる。

2 集成の対象と調査方法

(1) 集成の対象

集成対象地域は、縄文時代の青森県域とした。その西側(日本海側)に頁岩産地があり、東側(太平洋側)は良質なものが少なく、一部を玉髓が代替している。山形県域には優良な珪質頁岩が産し、宮城県域では珪質頁岩製石器が搬入され、碧玉など玉髓系の石材が使用される状況と類似する。東北地方の北端であるが、同一県域で東西の地域性の比較を行うことが可能である。

(2) 調査方法

先行研究である斎藤(2006)作成の表をもとに、各事例の特徴が明らかになるように項目を設定し、表1にまとめた。廃棄であることが明白な例や墓への副葬例は除外した。

そして堅穴建物の廃絶儀礼(中村 2013など)と関連する可能性を考察するために、異形土器をはじめとして多数の床面遺物が伴う例では、備考欄に他の出土品を記述した。

3 集成結果

表1のとおり、青森県域の各地に存在する。珪質頁岩製の剥片・両面調整石器・石槍・異形石器、玉髓製両極石器、磨製石斧の事例が確認できる。石器集中は石材産地から消費地まで広くみられる。堅穴建物跡では、遺物が多く残されている例に多い傾向がある。八戸市笛ノ沢(3)遺跡第19号住居跡のように長軸が11.56mの楕円形の大型住居跡にも存在する。

時代性としては、青森県域では縄文時代前期から中期(以降、すべて縄文時代例であるため、「縄文時代」を省略する)では蓬田村山田(2)遺跡のように日本海側の珪質頁岩産地で、遺構内外の石器集中例が多い。阿部朝衛(2007)の考えを当てはめて、石材産地では、剥片生産・運搬等の行為の中止、一時保管など、一まとめにして石器を扱う機会が多かったためと考えておきたい。フラスコ状土坑上部の壁面よりの例など出土状況に多様性がある。

中期中葉では竪穴建物内の剥片集積例が多い。中期末(大木10式併行期)には八戸市域を中心に複式炉を伴う竪穴建物跡からの出土例が多い。後期にもみられ、後葉では香炉形土器や完形の脚付石皿などを伴う例もある。晩期は外ヶ浜町宇鉄遺跡で石錐素材の例があるが、他に抽出できなかった。

4 事例の詳細

筆者が石器流通と関連すると考える石器集中事例を、図・写真とともに示す(文献は表1記載)。

(1)両面調整石器と石槍の流通

良質な珪質頁岩(珪質泥岩)を産する秋田県の女川層に相当する珪質頁岩の層は、青森県域では津軽地方と下北地方西部を中心に分布する。本稿に關係するものでは① 津軽地方南西部の西津軽郡深浦町から中津軽郡西目屋村にかけての大童子層、② 津軽半島北部の東津軽郡外ヶ浜町や蓬田村の小泊層、③ 津軽山地南部の五所川原市から青森市にかけての馬ノ神山層、④ 下北地方南西部のむつ市脇野沢の小沢層などである(図1)。

深浦町津山遺跡では、長さ13.5～17.4cmの両面調整石器が7点、フラスコ状土坑の上部から出土した(図2)。中期初頭の円筒上層a式期のものである。

むつ市脇野沢の瀬野遺跡でも尖端部が未形成の10.6～13.3cmの3点の石槍が、土坑の上面部で出土している。時期は前期中葉から中期後葉である。

中期中葉の青森市新城平岡(4)遺跡では、長さ6～7cmの小型の両面調整石器と削器が主柱穴に接するピット内から20点一括出土している。津山遺跡例に比べて小型であることが注意される。

青森市三内丸山遺跡周辺は縄文時代前期から中期にかけては遺跡群をなしており、中期中葉では、三内丸山遺跡のほかに三内丸山(6)遺跡、近野遺跡でも剥片集中がみられる。ヒスイ等遠隔地産の貴重品であれば拠点的集落である三内丸山遺跡を中継地とすることが考えられる。比較的産地の近い珪質頁岩の動きについては不明である。青森市域では十数km南側に離れた荒川上流で和田川層の珪質頁岩が採取できるほか、西部の天田内川などでも馬ノ神山層由来の珪質頁岩を採取できる(齋藤 2002)。他にも候補となる地域・遺跡があり(註8)、搬入先は不明である。局所的に事例が多い地域として指摘できる(図1)。遺跡密度が高いため、結果として多くなった可能性がある。

図3上～中段には、前期末葉から後期初頭を主体とする蓬田村山田(2)遺跡の出土資料を置いた。石器製作遺跡ならではの、多様な石器出土状況が報告されている。

図3中段左のB区遺構外の接合資料は2点の両面調整石器と8点の剥片が接合したものである。表皮部分を伴うが、良質の珪質頁岩である。山田(2)遺跡からは大型品を中心に両面調整石器が多数出土している。欠損した両面調整石器数点と敲石・剥片が共伴する第11号礫・石器集中遺構例がある。また、色の異なる石槍3点と石籠1点が重なって出土した第12号礫・石器集中遺構例では、石槍の先端の作り出しがなされていない。フラスコ状土坑の出土例では、底面に剥片が集中するB区第82号土坑例があるほか、開口部の縁辺付近から2点の石槍が出土したA区第5号土坑例がある(註9)。これらも、良質の珪質頁岩で製作されている。

中期の六ヶ所村富ノ沢(3)遺跡例では、尖端部を有する3点の珪質頁岩製石槍が一括出土している。長さ19.9cmの大型石槍は、写真から珪化の進んだ良質のものと推定できる。他は長さ9.0cmと9.7cmである。

三内丸山遺跡の第6鉄塔地区第Ⅲ層(中期)では、28点の石槍が一括出土している。写真的最下段は単独母岩であるが、他は同一母岩の2点もしくは4点でセットになっている。尖端部が未形成のものが多いが、形成済みのものを含んでいる。

(2) 剥片集中

図4は八戸市松ヶ崎遺跡の剥片集中である。いずれも中期中葉の円筒上層e式期の竪穴建物跡のピット内の出土品である。ピットによって石器の性格に多様性がある。第7号竪穴住居跡では碎片をピット内に入れている。剥片貯蔵ではなく石器製作残滓が片付けられた様相となっている(註10)。竪穴建物跡の床面のピットは保管・収納用だけではなく残滓収納のピットとしても使用されたと考えたい。

図5の三内丸山(6)遺跡第39A号竪穴住居跡ピット17では柱穴の中央上面に剥片集中がある。柱穴が埋められて、浅い窪みとなった時に置かれた可能性がある。

西目屋村水上(2)遺跡のSI1052例は中期末葉であるが、柱穴の上面に剥片集中がある。主柱穴の縁辺部に偏って出土した。住居の機能時点で柱に接して置かれたものと考えたい。詳細時期が不明のものでは単独ピットのSP905・S936内から剥片が一括出土した。他にも遺構外での剥片・碎片集中地点が4か所ある。

八戸市新田遺跡第11号住居跡は中期末の複式炉の事例であり、前庭部のピット内外に各1例の剥片集中がある。いずれも微細剥離剥片が多数を占める。宮城県野川遺跡で皮袋等に入れての運搬により微細剥離が生じたとする研究(鹿又 2010)を思わせる。注目されるのは複式炉前庭部からの出土という点である。複式炉は炉の面積が広く、石器の加熱処理(御堂島 1993)を行う場合に、適切な温度管理ができると考えられる。しかし剥片集中の剥片や、当該遺跡の石器群全体の観察が必要であることから、石器の加熱処理加工との関連は、今後の課題としている(註11)。

青森市安田(2)遺跡第26号竪穴住居跡例では、二つの剥片集中から珪質頁岩及び玉髓製の両極剥片等が多数出土した。2点の深鉢形土器が潰れた状態で見つかったほか、大型の有縁石皿と土偶が出土している。出土品の多く残された竪穴建物跡内からの出土事例といえる。

図6には、後期前葉から後葉の例を置いた。

青森市小牧野遺跡では、環状列石の造成部分の延長上から剥片集中と粘土埋納遺構が確認されている。剥片集中の断面図には、斜めに出土する剥片がある。剥片の下位をつなぐと、弧を描くことから腐朽した容れ物の存在が推定できる。竪穴建物跡内に中軸線を引いて位置を確認した研究(阿部勝則 2003)にならって、環状列石と関連遺構に中軸線を引くと、その中央の点から東に30°の線上に剥片集中と二つの粘土埋納遺構が存在する。偶然と解釈するのが妥当であるが、人工的な空間の中で中心から離れた縁辺に置く感覚は、竪穴建物内で奥壁に剥片を集中させる感覚と共通するかもしれない(註12)。

図6中段には、台付土器の台部分を逆さにして黒曜石製剥片を入れた七戸町猪ノ鼻(1)遺跡第36号住居跡出土例を置いた。写真からは列状の球顆が確認でき、北海道赤井川産の可能性がある。下段は外ヶ浜町尻高(4)遺跡第6号住居跡の例で、香炉形土器や脚付石皿も床面から出土している。ドットマップでみると住居跡北側に剥片集中とみなせる部分があるほか、剥片が密にまとまる部分がいくつもある。床面出土剥片からは接合資料が得られている。

図7上段には、後期後葉のむつ市川内町の鞍越遺跡SI01の床面出土遺物を置いた。二つの剥片集中

から計12点の剥片が出土している。注目されるのは、4点の異形石器と赤漆塗の赤色顔料残片の出土である。形状は少し異なるが、福島県馬場前遺跡第156号住居跡のピット11から出土したサメの歯状の異形石器4点(門脇 2003; 剥片1点とあわせ計5点の出土)と共通性がある。赤色顔料残片が異形石器を埋め込むための赤漆塗の柄だったとすれば、宮城県大崎市北小松遺跡のサメの歯を埋め込んだ木製品(宮城県教委 2021)に類似する可能性がある。少し離れて出土したアスファルト痕のある茎の太い有茎石鏸との関連は、出土状況からは言及できない。むつ市川内町鞍越遺跡SI01の床面では、四脚付きの石皿と香炉形土器の完形品が出土しており、遺物が多いことに注意したい。

図7下段には、青森市新城平岡(4)遺跡例を置いた。中期(詳細時期不明)のもので異形石器3点が、抉りを持つ黒曜石製石槍1点とともに線状に並んで出土した。紐で連になっていた可能性とともに、中央の抉り部分を柄に装着した可能性もある。

(3) 磨製石斧の集中

図8～9には磨製石斧の出土例を掲載した。4点での出土事例が多い。

六ヶ所村上尾駒(2)遺跡は花崗岩類製の磨製石斧製作遺跡であり(齋藤 2004)、初期段階から研磨前までの4点の未成品が一括出土した。刃部を上にして出土したが、刃を上にすることで刃部への負荷が減り、欠損のリスクを回避することができる。刃が下の岩手県清田台遺跡例(岩手埋文 2003)などでは、有機質の容器内に収蔵されるなど、刃部を傷めない工夫がなされていたと考えたい。

地域は異なるが、福岡県久留米市正福寺遺跡第7次調査SK88では約4000年前の柄付きの磨製石斧が出土している(久留米市教委 2017)。石斧本体を保護するようにソケット状の網組製品(A133)が出土しており、当時の人の刃部保護への細やかな気遣いを物語っている。柄付きの石斧自体も、網かごの中に入れられており、石斧を大切に護って人が移動したことを伝えている(熊代 2019)。

八戸市笹子(2)遺跡は磨製石斧の素材が得られる海岸部から離れているが、磨製石斧未成品2点と製作道具の多面体敲石(阿部朝衛 1984)2点がセットで出土した。図中1は側面図にみられるように正面刃部側からの剥離で抉りが生じている。磨製石斧の製作に熟達した人でないと、この状態から刃部を整えるのは難しい。図中2は、正裏両面ともに刃部からの剥離が成功せず、刃部が潰れている。この状態から欠損を回避しながら正裏の刃部付近を整形しなおすのは難しいと思われる。時間をかけて刃部を整えるために取り置きしたものが、最終的に廃棄されたものと考えたい。笹子(2)遺跡では磨製石斧石材産地から離れた場所で、その未成品だけではなく製作道具の多面体敲石も出土した。このことにより八戸市牛ヶ沢(4)遺跡(八戸市教委 2004)等で各加工段階の磨製石斧未製品が多数出土する事例を読み込めるようになった。隣接する笹子(3)遺跡では土器内から3点の完形の磨製石斧が出土している。調査区の遺構は少なく、製作・使用的場所から離れた地点での石斧集中の例である。

おわりに

青森県域では縄文時代前期から中期では蓬田村山田(2)遺跡や西目屋村水上(2)遺跡のように、日本海側の石材産地で、遺構内外の石器集中例が多い。出土する場所もフラスコ状土坑内の底面・上面例など多様性がある。石材産地では、剥片生産・運搬等石器を一まとまりで、扱う機会が多いと考えられる。その行為の中止、一時保管などのため、静止状態に入る機会が多かったと考えたい。

竪穴建物内の出土例は、八戸市松ヶ崎遺跡と三内丸山遺跡周辺の事例から縄文時代中期中葉の例が

多い。大規模遺跡及びその周辺遺跡例が多いと言い換えられるかもしれない。

中期末葉では八戸市域を中心に複式炉を伴う竪穴建物跡からの出土例が多い。近接する岩手県域の剥片集中事例の約8割が大木10式前後であること(阿部勝則 2003)と共鳴する。しかし、中期末葉の集落跡でも階上町野場(5)遺跡、八戸市田代遺跡・岩ノ沢平遺跡・黒坂遺跡など石器集中事例がみられない報告も多い。時代性、地域性に加えて、家の終い方や物の片付け方、再利用の有無など複数の要因が作用したと考えておきたい。

その後は後期後葉の例が多い。この時期には竪穴建物内から完形土器が出土する例が多く、竪穴建物の廃絶儀礼の文脈で検討されている(中村 2013ほか)。石器集中は土器と同一に捉えられるか不明である。竪穴建物内に残される道具が多いため、結果として石器も残された可能性がある。

磨製石斧については、製作道具である多面体敲石と共に出土する例があり、未成品での流通を示唆している。磨製石斧にとっては刃部が、石槍にとっては尖端部が最も重要である。未成品の流通は、流通途上で重要部分が欠損するリスク回避の意味合いもあったと考えたい。また、使用者が道具のメンテナンスのみならず、自らが納得のいく最終仕上げを望んだことも考えられる。

謝辞

本稿を作成するにあたり、堅穴建物跡の剥片集中と石器の加熱処理に関連した部分については、御堂島正氏から御教示・御指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

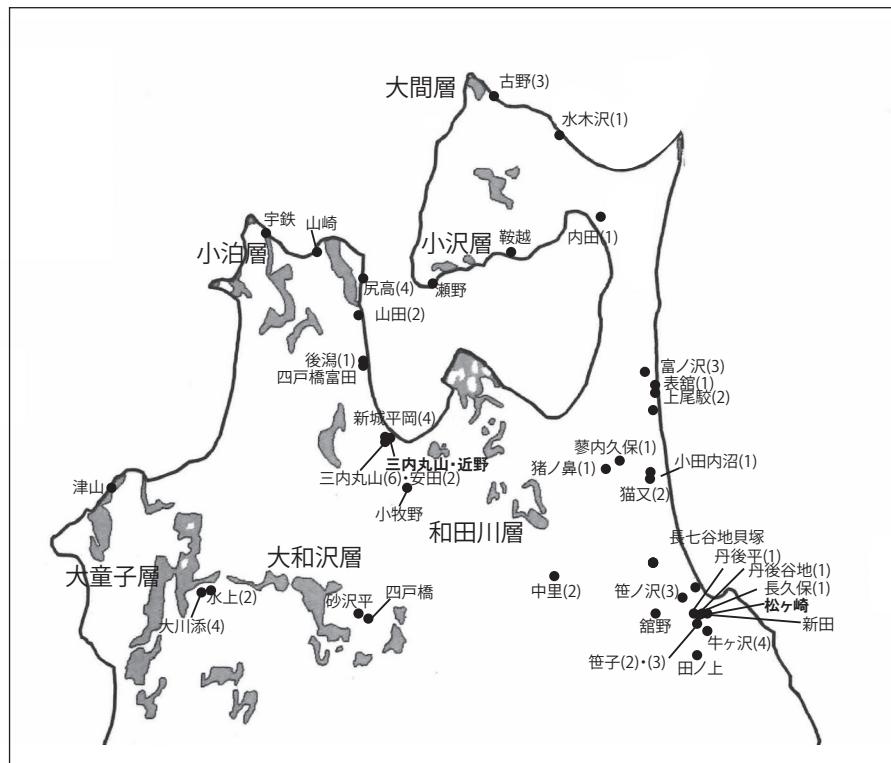


図1 珪質頁岩層(秋田県女川層相当)と遺跡

(註1) 田中英司の論考には、デボという視点から、磨製石斧をはじめとする各種石器・ヒスイ等の集中について、流通や個人保有の問題についてまでも深く考察されている。剥片集中については主に「原材収蔵デボ遺構」の区分の中で、全国各地の事例、旧石器・弥生時代例を含めて全体像が分かるものとなっている。佐原真も「デボ研究の意義は本来、デボそのものにあるのではなく、そこから派生する交易・生産等々多くとの係わり、その出現・消滅に関しての歴史的解明こそ重要である」と述べている(佐原 1985)。佐原はヨーロッパのデボも、定義・概念に搖れがあると紹介した。田中は佐原の定義からはずれる集落内・墓域のものを「デボ遺構」と区分して取り上げた(田中 1995)。後には統合され、日本の先史時代における事例を読み込みながら、佐原の定義とは、変化したといえる。田中は「デボとは、様々な目的のために設置されながらも、使用されるまでの間に猶予期間のおかれた器物の残存現象である。無論廃棄物の集合に対して当てはまらない。空間的な特性を伴って、道具類を必要とする時がくるまで収蔵・保管等を行った痕跡」であるとした(田中 2001)。筆者は、田中の論考から多くの事を学んだ。しかし、これを用語として使用できるまで咀嚼できていない。そのため、本稿ではデボという用語を使用していない。

(註2) 筆者は三内丸山遺跡第603号住居跡等の石器集中を調査・報告(表1参照)した際に、類例を集めたことがあった。やりかけて久しい事を形にしながら情報共有につなげたいという思いが、本編の執筆動機となっている。

(註3) 例えば秋田県北秋田市の橋場岱D遺跡の報告書では小又川流域の遺跡群での石器集中事例の記載がなされている(北秋田市教委 2006)。八戸市長久保(2)遺跡の報告書では、八戸市域の縄文時代の竪穴建物跡の集成が行われた。その中で、剥片集中が注目された。床面出土のものは壁際に、ピット出土のものは主柱穴を思わせるピットのそばから出土する等、植村(1997)が指摘した事項と類似した結果となった(小山 2004)。

(註4) 多くの事例は、あえて儀礼的としなくても読み込める。表1のように中期後葉から後期後葉にかけて竪穴建物内で完形土器・異形土器・香炉形土器、有縁石皿等とともに剥片集中が確認できる例がある。それらの遺物は剥片集中の無い竪穴建物内でもみられるため、青森県域の遺跡では剥片集中という要素と相関させることは難しい。注意を惹く遺物の出土遺跡として中期末葉(大木10式期)の福島市和台遺跡例がある。土偶が出土した18号住居跡のPit1検出面から20点の縦長剥片が図示された。狩猟文土器が出土した193号住居跡の周溝から縦長剥片6点が図示された(飯野町教委 2003)。報告書では「複式炉の埋没過程あるいは埋没後の複式炉直上にほぼ完形の土器を遺棄している事例」が着目され、複式炉に関する儀礼的行為があつたと捉えられている。後の調査では、遺物の少ない207号住居跡にも剥片集中がみられる(飯野町教委 2004)。剥片集中と儀礼の関りは現状では不明と思われる。

一方で、岩手県や福島県では中期末の事例が多いため、一定確率でその時期の廃屋から、集中する剥片の探索と持ち帰りが可能である。青森県域の後期後葉においても、完形土器や脚付石皿を含めて獲得できる可能性がある。利用可能なものを活用しない点に建物竪穴儀礼との接点がありうる。その廃絶儀礼として遺棄されたため、利用しなかつたとする解釈も成りたちうる。

地域も時代も異なるが、弥生時代中期後半頃の大坂府寛弘寺遺跡竪穴住居3010では、サヌカイト製の剥片が多数、竪穴建物跡内のピットから出土している(大阪府教委 1990)。遺跡は、サヌカイト産地の大坂府・奈良県境の二上山の生駒山西麓から約7km離れている。白黒写真からの判断ではあるが最上面のサヌカイト製剥片は白く風化がみられる。その下の第2面では風化が弱く、第3面から最下層の第5面まで新鮮な黒色を保っている。太陽光にさらされた期間が一定期間あったと想定される。寛弘寺遺跡は規模の大きな集落跡であり竪穴住居3010の廃絶後、人の居住や往来が続いている可能性がある。埋没するまで露出していた石材が利用されなかつたのは、それを制止する何かがあつたと思われる。

(註5) 剥片集中は竪穴建物内外にあり、屋外土坑内の大量出土例もある。剥片自体が、道具の素材、カッティングの道具、石核、炉で熱したアスファルトの搔き取り具、石器製作残滓など、解釈には様々な選択肢がある。不要物であったのか(廃棄により近いか)、有用物であったのか(貯蔵・埋納など、遺棄により近いか)は遺跡調査者には不明確な場合が多く、不要物から有用物への転換もありえることが背景にある。

(註6) 冬場への備えとして、剥片や石器の作り置き、それらの交換・流通が想定されている。一括して石器が保管・移動する機会となるために、石器集中の発生する機会が増える。また、冬に入ると竪穴建物内で石器づくりを行う機会も増え、剥片が建物内に一時保管される機会が増える。それらの中に回収されない例も生ずることは想定できる。

(註7) 獅子舞岩の半透明貞岩は外観的にも特徴があるとされる(秦 2007)。山形県米沢市花沢A遺跡では竪穴建物跡内の剥片集中が獅子舞岩産の両極剥片と考えられたことから、産地からの流通を意識した分析が行われるようになった(渋谷 2019)。

(註8) 外ヶ浜町大平墓地公園遺跡が搬出元の遺跡候補となりうる(齋藤ほか 2020)。蓬田村山田(2)遺跡も同様である。

(註9) 山田(2)遺跡では石器製作残滓の一括廃棄もある。プラスコ状土坑のA区第206号土坑からは、石核と剥片が多数出土し原石の約半分の大きさまで接合している。A区13号土坑で剥片・石核類5kg、第33・120・153号土坑で剥片多数、53・169号土坑で20cm大の棒状礫が10点以上廃棄されている。B区には剥片集中範囲がある。事例の詳細は報告書を参照されたい。山田(2)遺跡では報告書の総括部分で原石から両面調整石器に、そして石槍にいたる変化がまとめられた(小田川 2011)。一方、珪質貞岩を搬入する側の八戸市域では、以前から剥片石器全体の中で石鎌などの製品が多くを占め、剥片が少ないことが注意されていた。良質な珪質貞岩が得られない八戸市域では、津軽・下北・岩手県の脊梁山地からの流通が想定され、石槍や石匙の完成品・半製品の形状で搬入されたと推定されていた(三宅 1984)。多数の剥片が出土する石材産出地の石器製作遺跡の状況と概ね対応していると考えたい。

(註10) 類似するのは三内丸山(6)遺跡B区第10号住居跡例である。石鎌未成品、ポイントフレイクなどの石器製作残滓

が床面のピット内から出土し、接合資料が得られている。竪穴建物内では「炉に付随する焼土・灰溜めのピット」として中から多量の焼土・灰が出土するピットも知られている(有名なものでは合掌土偶の出土した八戸市風張(1)遺跡例など:藤田 1990)。いずれも建物内の片付け行為の中で、残滓がピットに入れられたものと考えたい。

(註11) 中期末葉の複式炉を伴う竪穴建物跡内の剥片集中事例は、青森県域では八戸市域など岩手県北部に近い太平洋岸で多い。地域が限定されるため岩手県や福島県のように突出して多いわけではない。剥片集中の位置は、東北各県とも、炉の反対側の壁際の位置にする例が多いように思われる。しかし山形県米沢市花沢A遺跡の新潟県獅子舞岩産の半透明頁岩の例のように、中期末葉で複式炉を伴うものは玉髓質の珪質頁岩の剥片集中が複式炉周辺のピットから出土する例が散見される。複式炉は炉の表面積が広い。硬質な石材で石器の加熱処理を行う場合に、最適な場所で灰の中に入れるなど温度管理が容易である。秋田県小林遺跡でも複式炉の脇のピットに剥片集中がある。良質な珪質頁岩である母岩Aには被熱に伴う剥落が認められるものがある(秋田県教委 2002)。炉の中で加熱処理されたものが、小ピット内に戻された可能性がある。遺構外のものでも被熱に伴う剥落が存在するものがあり、注意したい。

(註12) 竪穴建物跡の剥片集中例では阿部勝則(2003)の集成図では中軸線の中央から左右に10~40°の位置に多いように思われる。さらに付け加えるなら、炉に近い310~350°のものも一定数存在する。

引用・参考文献

秋田県教育委員会 2002『小林遺跡I 繩文時代編』秋田県344集
 飯野町教育委員会 2003『和台遺跡—第1次~第4次調査報告—』飯野町5集
 飯野町教育委員会 2004『和台遺跡2』飯野町6集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1978『都南村 湯沢遺跡(昭和52年度)』岩手県2集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 雉石町 桜松・除I・除II 盛岡市下猿他I遺跡(昭和49年度・51年度・55年度)』岩手県29集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1983『湯沢遺跡発掘調査報告書(遺物編)』岩手県66集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『清田台遺跡発掘調査報告書』岩手県412集
 大阪府教育委員会 1990『寛弘寺遺跡発掘調査概要・IX』
 北秋田市教育委員会 2006『地蔵岱A遺跡・橋場岱D・E・F遺跡』北秋田市3集 65頁
 久留米市教育委員会 2017『日渡遺跡群VII 正福寺遺跡第7次調査「網組製品遺物編」』久留米市380集
 気仙沼市教育委員会 2018『台の下遺跡』気仙沼市11集
 仙台市教育委員会 1996『野川遺跡』仙台市205集
 八戸市教育委員会 2004『牛ヶ沢(4)遺跡III』八戸市104集
 宮城県教育委員会 1987『小梁川遺跡』宮城県122集
 宮城県教育委員会 1988『大梁川遺跡』宮城県126集
 宮城県教育委員会 2021『北小松遺跡ほか-田尻西部地区は場整備事業に係る発掘調査総括報告書-』宮城県126集
 會田容弘 2000「繩文時代の頁岩製石刃製作と流通-東北地方南部のありかた-」『山形考古-加藤稔会長古希記念論集-』第6巻第4号
 阿部昭典 2009「繩文時代における徳利形土器の祭祀的侧面の検討-中期末葉の東北地方を中心に-」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号
 阿部朝衛 1984「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第2号
 阿部朝衛 1997「新潟県北部地域における繩文時代の石器使用とその背景」『帝京史学』第12号
 阿部朝衛 2007「石器のメンテナンス(石鎌)」『繩文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』同成社
 阿部勝則 2003「岩手県における繩文時代中期の剥片集中遺構について」『研究紀要XXII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 阿部芳郎 2014「繩文時代における黒曜石の利用と特質」『季刊考古学・別冊21 繩文時代の資源利用と社会』雄山閣
 磯村亨・吉川耕太郎 2009「三種町道の下遺跡における繩文時代の石器集積遺構」『秋田県埋蔵文化財センター紀要』第23号
 植村泰徳 1997「繩文時代の剥片・碎片集中遺構、集中地点について-福島県内の事例-」『福島考古』38
 小田川哲彦 2011「剥片石器」青森県教育委員会『山田(2)遺跡III』青森県508集
 小山浩平 2004「剥片石器集中遺構について」青森県教育委員会『長久保(2)遺跡』青森県367集 57頁
 大場正義 2014「高瀬山遺跡繩文中期末葉の石器資料集積遺構出土資料の技術学分析-繩文石刃技術と短形剥片剥離技術の動作連鎖、そして“コドモ”的発見-」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』第6集
 萩幸二 2005「繩文時代の大分県大野川流域における姫島産黒曜石の流通の様相」『考古学ジャーナル』525
 鹿又喜隆 2010「更新世最終末の石器集中遺構に含まれる道具の評価-宮城県仙台市野川遺跡の機能研究と複製石器の運搬実験を通して-」『日本考古学』第30号
 門脇秀典 2003「繩文石器に関する2・3の問題-檜葉町馬場前遺跡出土の石器について-」『福島県文化財センター白河館研究紀要2002』
 熊代昌之 2019「4000年前の編みかごから見えてきたこと-久留米市・正福寺遺跡-」『東名遺跡シンポジウム記録集見えてきた! 繩文の編みかご文化』佐賀市教育委員会

小杉康 1995 「遙かなる黒曜石の山やま」 『縄文人の時代』 新泉社

斎藤岳 2002 「青森県における石器石材の研究について」 『青森県考古学会30周年記念論集』

斎藤岳 2004 「三内丸山遺跡の磨製石斧について」 『特別史跡 三内丸山遺跡年報』 7

斎藤岳 2018 「円筒土器文化の石器群成立と北海道式石冠」 『研究紀要』 第23号 青森県埋蔵文化財調査センター

斎藤岳・杉野森淳子・岡本洋 2020 「大平墓地公園遺跡出土石器について」 『青森県立郷土館研究紀要』 第44号

斎藤慶史 2006 「青森県内における剥片集中遺構について」 青森県教育委員会『新田遺跡II』 青森県410集

斎藤慶史 2017 「B区第10号堅穴建物跡で検出された石器製作残滓廃棄ピットについて」 青森県教育委員会『三内丸山(6)遺跡V』 青森県585集

佐原真 1985 「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第7集

渋谷孝雄 2019 「HY10出土の両極技法を持つ石器群について」 米沢市教育委員会『花沢A遺跡第III次発掘調査報告書』 米沢市114集

須原拓 2016 「中野遺跡の剥片集中遺構について-主に出土した剥片の分析から-」 『研究紀要』 第35号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

大工原豊 2002 「黒曜石の流通をめぐる社会」 『縄文時代社会論（上）』 同成社

大工原豊 2008 『縄文石器研究序論』 六一書房

田中英司 1995 「日本先史時代のデボ」 『考古学雑誌』 第80巻第2号

田中英司 2000 「斧のある場所」 『日本考古学』 第9号

田中英司 2001 『日本先史時代におけるデボの研究』 千葉大学考古学研究叢書1

田中英司 2007 「デボと交易」 『縄文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』 同成社

田部剛士 2007 「サヌカイトの供給(二上山)」 『縄文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』 同成社

長崎元廣 1984 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」 『中部高地の考古学III』 長野県考古学会

中村耕作 2013 「住居廃絶儀礼における縄文土器」 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』 アム・プロモーション

山田昌久 1985 「縄文時代における石器研究序説」 『論集 日本原史』 吉川弘文館

藤田亮一 1990 「八戸市風張(1)遺跡出土の合掌土偶」 『考古学雑誌』 第76巻第2号

秦昭繁 2007 「珪質頁岩の供給」 『縄文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』 同成社

御堂島正 1993 「加熱処理による石器製作-日本国内の事例と実験的研究-」 『考古学雑誌』 79-2

三宅徹也 1984 「石器製作について」 『和野前山遺跡』 青森県教育委員会 青森県82集

山科哲 2010 「石器石材の流通と社会」 『移動と流通の縄文社会史』 雄山閣

山科哲 2010 「黒曜石の一括埋納と流通」 『移動と流通の縄文社会史』 雄山閣

山科哲 2017 「霧ヶ峰南麓及びハケ岳西南麓(茅野市域)における縄文時代の黒曜石集積」 『長野県考古学会誌』 154号

吉川耕太郎 2012 「シリーズ「遺跡を学ぶ」083 北の縄文鉱山上白川遺跡群」 新泉社

吉川耕太郎 2014 「多様な石器を生み出す石材・頁岩の多目的利用-東北前期と中期末～後期前葉の事例を中心に-」 『季刊考古学・別冊21 縄文時代の資源利用と社会』 雄山閣

吉川耕太郎 2020 「秋田県南部内陸域における珪質頁岩産地分布調査-石器石材産地特性の理解に向けて-」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第34号

図・写真の出典

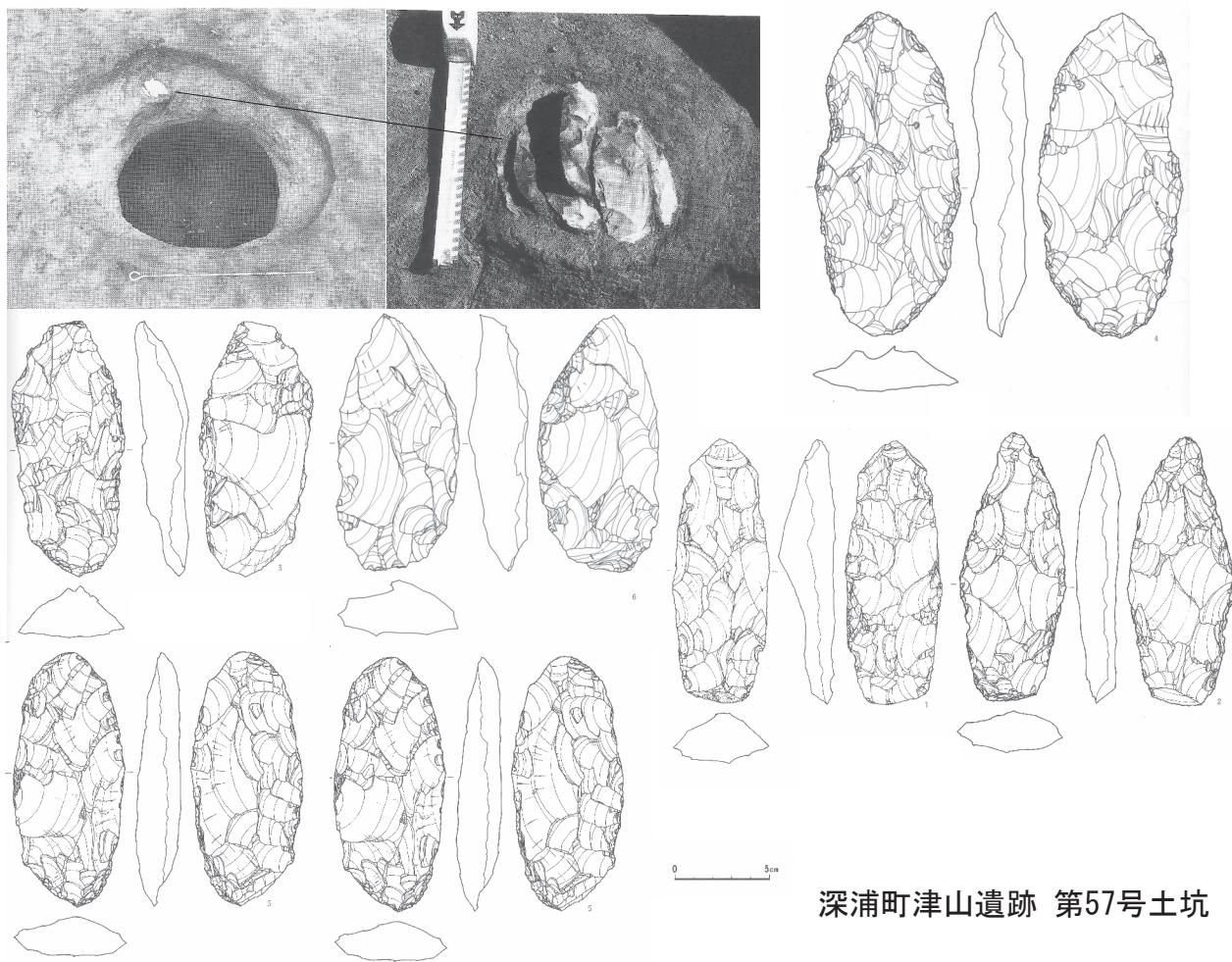
図1 ; 秦 2007を改変。以下は次の報告書から引用

図2 上段 ; 青森県教委 1997 『津山遺跡』。図2左下 ; 脇野沢村教委 1998 『青森県脇野沢村瀬野遺跡』。図2右下 ; 青森市教委 2012 『石江遺跡群V』。図3上段・中右・下段左上 ; 青森県教委 2010 『山田(2)遺跡II』。図3中段左 ; 青森県教委 2011 『山田(2)遺跡III』。図4 ; 八戸市教委 1994 『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』。図5左上 ; 青森県教委 2001 『三内丸山(6)遺跡III』。図5右上・中段 ; 青森県教委 2017 『水上(2)遺跡III』。図5左下 ; 青森県教委 2006 『新田遺跡II』。図5右下 ; 青森県教委 2001 『安田(2)遺跡II』。図6上段 ; 青森市教委 2006 『小牧野遺跡IX』。図6中段 ; 青森県教委2021 『猪ノ鼻(1)遺跡』。図6下段 ; 青森県教委1985 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡』。図7上半 ; 川内町教委 1993 『鞍越・裴川遺跡発掘調査報告書』。図7中段右 ; 宮城県教委 2021 『北小松遺跡ほか』。図7下段 ; 青森市教委 2012 『石江遺跡群V』。図8左上 ; 青森県教委 1988 『上尾駒(2)遺跡』。図8右上 ; 青森県教委 2010 『笛子(2)遺跡』。図8中段右 ; 八戸市教委 1988 『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書VII』。図8下 ; 青森県教委 1989 『館野遺跡』 ; 図9上～中段左 ; 三沢市教委 1992 『小田内沼(1)・(4)遺跡』。図9中段右 ; 青森県教委 2012 『四戸橋富田遺跡・後潟(1)遺跡II』。図9下段 ; 青森県教委 2007 『沢ノ黒遺跡』。

表1 青森県域の石器集中事例

遺跡名	遺跡所在地	遺跡名	時期	出土位置 (建物内/集落内)	石材	母岩	接合	器種	総数	備考	文献
江野瀬跡	青森市	第14号堅穴住居跡	中期中葉(円筒上層d式)かそれ以前	特殊施設内、住居跡隙間	珪質頁岩	2母岩	6組		46点	石器集中として範囲は広く、詳細不明。中核は堅穴よりと特徴施設内の各地点。	青森県教育委員会2005『近野遺跡III』県394集
三内丸山(6)遺跡	青森市	第130号土坑	中期中葉(円筒上層e式)	底面下位	ビット上面～覆土上部	頁岩	单一	不定形石器・剥片	67点	剥片集中	居住跡の可能性あるが必ず無い。
三内丸山(6)遺跡	青森市	第39号堅穴住居跡	中期中葉(円筒上層e式)	ビット17上部	珪質頁岩	6母岩	7組	二次調査のある剥片15・剥片6・碎片47(38・メントフレイク多數)	67点	軽質で粗悪な石質が多い、石器製作残渣を小ビット内に充填。床面直上から完形土器1点。	青森県教育委員会2017『三内丸山(6)遺跡V』県555集
安田(2)遺跡	青森市	第26号堅穴住居跡 (集積1)	後期前葉	床面	珪質頁岩、玉髓質頁岩	複数	9組		59点	土器、大型有縫石皿、同一デザインの完形土器2点	青森県教育委員会2001『安田(2)遺跡II』県303集
新後平岡(4)遺跡	青森市	第36号堅穴住居跡 (集積2)	後期前葉	床面	珪質頁岩、玉髓質頁岩	複数	7組		32点		青森市教育委員会2012『石江遺跡遺跡V』市112集
小牧野遺跡	青森市	剥片埋納遺跡SK-07	中期前葉(円筒上層c式)	床面	珪質頁岩、黑曜石	複数			4点		青森市教育委員会2002『小牧野遺跡IV』市64集、2006『小牧野遺跡IX』市355集
古野(3)遺跡	風間浦村	第3号建築跡	後期初頭	床面直上	珪質頁岩	複数	4組	剥片66・二次加工剥片8・他用剥片9・不定形器1・2cm以下の剥片39	123点	直立ちしくは斜位状態の剥片が目立つ。後に石器使用するための素材を一時的に保管しておいたための埋納遺構。	青森県教育委員会2020『古野(3)遺跡』県61集
海野瀬跡	むつ市鰯野沢	第4号土坑	前期中葉～中期後葉(十腰内1群)	整地部分	珪質頁岩	複数			12点	合石様の礫点2点、石礫2点	青森県教育委員会1998『青森県駿野沢村海野瀬跡』
鞍ヶ瀬跡	むつ市川内町	S1-01	第4号捨場・剥片集中	後期初頭から後葉	珪質頁岩	複数	3組	剥片	石礫3点		駿野沢村教育委員会1993『駿越・奥川遺跡発掘調査報告書』
内田(1)遺跡	むつ市	早期(吹切式?)	遺跡外・V層下部	珪質・自然礫点	石	3点			約10点	剥片は約10mm四方内一筋は縦切筋を立てるよう間に1点。埋納の袋のような容器状。	川内町教育委員会2018『内田(1)遺跡』県592集
新納屋(2)遺跡	六ヶ所村	石堆集墳跡	早期(吹切式?)	遺跡外・V層下部	珪質・自然礫点	石	350点	剥片は縦切筋を立てるよう3号生居跡吹切式V層内にも石堆8点集中	約50点	「極めて脆弱な石材」。ヒンジフクチャーモ数。	青森県教育委員会1981『新納屋(2)遺跡』県62集
表館(1)遺跡	六ヶ所村	第1号剥片集積跡	早期末葉	住居跡に隣接	珪質頁岩	数個体			236点	「極めて脆弱な石材」。	青森県教育委員会1989『表館(1)遺跡III』県120集
富沢(3)遺跡	六ヶ所村	遺跡外	中期(円筒上層d式)	遺跡外	珪質頁岩	複数			3点	集中出土の状況写真掲載。C1-296号土壇も8点の石	青森県教育委員会1993『富ノ沢(3)遺跡』県147集
大石平瀬跡	六ヶ所村	19号土壇	後期前葉	堆積土中部の上より	珪質・兩極剥片及び結合資料等10点	石	19点以上			19点以上	青森県教育委員会1987『大石平瀬発掘調査報告書III』県102集
上尾駿(2)遺跡	六ヶ所村	CJ-120号土壇	後期前葉	堆積土中部	珪質頁岩	複数	28組	くさび形石器7点・兩極剥片・石核	3点	集中出土の状況写真掲載。C1-296号土壇も8点の石	青森県教育委員会1988『上尾駿(2)遺跡』県115集
根木水遺跡	野辺地町	石器集墳跡	前期末～中期	遺跡外	珪質頁岩	無		打製石斧・大形石礫	29点	未完成品2刀部等残片含む。	青森県教育委員会1983『佐原遺跡・陳馬川原遺跡・根木水遺跡』県77集
猪ノ鼻(1)遺跡	七戸町	第36号堅穴建物跡	後期?	床面直上	黒曜石					倒立した台付土器部のから出土。他の遺物の出土なし。	青森県教育委員会2021『猪ノ鼻(1)遺跡』県161集
蓼内久保(1)遺跡	東北町	第21号堅穴住居跡	中期末(大木10件)	主柱穴上部の張出し部	珪質頁岩/石英岩	無		二次加工剥片・微細剥離片各1点/破片2点	約5点	二次加工剥片(削器)に覆れ・摩耗あり。早期陶器早稻田窯の土器片疊35点の集中点があるり、漁網に保管されていること考察。	北町教育委員会2008『蓼内久保(1)遺跡』
猫又(2)遺跡	三沢市	第212号遺構フレーク範囲	中期末～後期初頭	床直上	玉髓			石髓2・石髓未製品1・剥片		長輪形ラス。縁辺の部分も大型。	三沢市教育委員会2011『猫又(2)遺跡・遺構編1(住居跡)』三沢市27-2集
第30号遺構フレーク集積	三沢市	中期末～後期初頭	4層	珪質頁岩	玉髓?			石髓2、スクレイバー4・剥片?			三沢市教育委員会2011『猫又(2)遺跡・遺構編1(住居跡)』三沢市27-2集
第313号遺構フレーク集積	三沢市	中期末～後期初頭	床直上?	珪質頁岩				スクレイバー2・コア2・剥片21点	2組	完形土器2点	三沢市教育委員会2013『猫又(2)遺跡・遺構編1(住居跡)』三沢市27-2集
第343号遺構フレーク集積	三沢市	中期末～後期初頭	床直上	珪質頁岩	玉髓?			スクレイバー4・石髓1・磨製石斧	12点	最上部に土器片1点。袋状の植物もしくは動物製品	三沢市教育委員会1992『小田内沼(1)・(4)遺跡』三沢市10集
小田内沼(1)遺跡	三沢市	集石遺構	後期前葉(十腰内1式)	遺跡外	珪質頁岩	無		7号岩2・砂岩5	32点	の中央に底点がある。	十和田湖教育委員会201『中里(2)遺跡』
中里(2)遺跡	十和田市	剥片集積遺構	前期?(中輪洋石下位)	遺跡外	珪質頁岩	無					八戸市教育委員会1982『長七谷遺跡発掘調査報告書』市集
長一谷地貝塚	八戸市	8号遺跡地点	早期末葉(早稻田5層)	ビット					70点	ぎっしりと詰まった状態	

遺跡名	遺跡所在地	遺跡名	時期	出土位置 (建物名/集落名)	石材	母岩	接合	器種	絶数	備考	文献
長七谷貝塚	八戸市	第5号堅穴住居跡	早期末葉-早稻田(鰐)	ビット覆土	石造4、尖頭器3、石器7、石鏡2、スクリューハード、磨製石斧4			石器と尖頭器は、結束して組み重ねた出土状態	27点		青森県教育委員会1980『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』県57集
塙ノ沢(3)遺跡	八戸市	第19号堅穴住居跡	中期初頭(円筒上層a式)	ビット上面、住居跡壁際				土器・石器多数出土	19点		青森県教育委員会2004『塙ノ沢(3)遺跡IV』県32集
松ヶ崎遺跡	八戸市	第7号堅穴住居跡※	中期初頭(円筒上層a式)	住居跡壁際、床面及び周溝上面				チップ床面・ビットから大型深鉢等土器多數	440点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
田久保(2)遺跡	八戸市	第11号堅穴住居跡	大木Sb～複数式以前	床面				堆積土から大型深鉢等土器多數	14点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
新田遺跡	八戸市	第13号堅穴住居跡P19	中期中葉(円筒上層e式)	ビット覆土				土器・石器多數出土	51点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
第13号堅穴住居跡P46	八戸市	中期中葉(円筒上層e式)	ビット覆土					360g、堆積土から大型深鉢等土器多數	51点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
第14号堅穴住居跡P12	八戸市	中期中葉(円筒上層e式)	ビット覆土					土器・石器多數出土	78点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
第14号堅穴住居跡P13	八戸市	中期中葉(円筒上層e式)	ビット覆土					土器・石器多數出土	70点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
田久保(1)遺跡	八戸市	第1号堅穴住居跡c19	中期後葉(複数式)	ビット覆土	碧玉			土器・石器多數出土	47点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
長久保(2)遺跡	八戸市	第3号堅穴住居跡	中期後葉(複数式)	床面、住居跡壁際	珪質頁岩		複數存在	土器・石器多數出土	26点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
第5号不明遺跡		中期末		遺跡外周層	珪質頁岩	5母岩以下	無	全て微細刻剥片	8点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
第7号不明遺跡		中期?		遺跡外周層	珪質頁岩	15母岩以下	2組	微細刻剥片29、剥片3	32点		八戸市教育委員会1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書65』市60集
新田遺跡	八戸市	第11号堅穴住居跡	中期末	新竹前庭部の壁際	珪質頁岩	7母岩以下	無	微細刻剥片25、剥片2、二次加工	28点		八戸市教育委員会2006『新田遺跡II』県410集
第11号堅穴住居跡		中期末		新竹前庭部の壁際	珪質頁岩	8母岩以下	2組	微細刻剥片21、剥片4、二次加工	25点		八戸市教育委員会2006『新田遺跡II』県410集
剥片統2		中期末?		遺跡外周層	珪質頁岩	15母岩以下	無	微細刻剥片1、直線剥片1	31組		八戸市教育委員会2010『塙子(2)遺跡』県80集
塙子(2)遺跡	八戸市	第1号堅穴住居跡	中期末～後期前葉?	遺跡外周層	珪質頁岩	7母岩以下	無	磨製石斧未完成品2・多面体破片52	4点		八戸市教育委員会2010『塙子(2)遺跡』県80集
丹後谷地遺跡	八戸市	第45号堅穴住居跡	後期後葉(十腰内IV群)	ビット覆土				剥片1	82点		八戸市教育委員会1986『八戸市新都心区域内埋藏文化財発掘調査報告書II』市15集
第56号堅穴住居跡		後期前葉(十腰内I群)	ビット覆土					微細刻剥片21、剥片4、二次加工	28点		八戸市教育委員会1986『八戸市新都心区域内埋藏文化財発掘調査報告書II』市15集
丹後平(2)遺跡		第10号堅穴住居跡	後期中葉	床面、住居跡壁際	珪質頁岩	8母岩以下	2組	微細刻剥片1、直線剥片1	28点		八戸市教育委員会1986『八戸市新都心区域内埋藏文化財発掘調査報告書II』市15集
四戸橋富田遺跡	青森市	第1号石器集中遺跡	後期前葉～後葉(十腰内I群)	長軸2.1～短軸1.4mの範囲内(土坑?)	珪質頁岩	8母岩以下	1組	磨製石斧未完成品2・微細刻剥片各1点/直線剥片1	80点		八戸市教育委員会2012『四戸橋富田遺跡・後堀(1)遺跡II』県512集
沢ノ黒遺跡	風間浦村	第1号捨て場	前期末(円筒下層a式)	中期初頭(円筒上層a式)	磨製石斧	7母岩以下	無	磨製石斧未完成品2・多面体破片52	4点		青森県教育委員会2007『沢ノ黒遺跡』県435集
上尾駿(2)遺跡	六ヶ所村		後期前葉	遺跡外・第II層	閃綠岩			剥片1	8点		青森県教育委員会1988『上尾駿(2)遺跡』県115集
塙子(3)遺跡	八戸市		後期前葉(十腰内I)	遺跡外	閃綠岩			磨製石斧未完成品(打製石斧段階含む)	4点		八戸市教育委員会1988『八戸市新都心区域内埋藏文化財発掘調査報告書III』市27集
館野遺跡	南部町	第33号土坑	前期前葉(深郷田式)～中葉(円筒下層a式)	前庭面(八戸郷田式)～中庭(土坑最上部)	珪質頁岩			磨製石斧4点	3点		青森県教育委員会1989『館野遺跡』県119集
堅穴遺跡内の出土例											
(参考) 石器集中の可能性があると筆者が判断したモチ											
野木遺跡	青森市	第629号堅穴住居跡	前期末葉(円筒下層d式)	覆土	珪質頁岩			剥片集中とされていないが、S-19・24・26で同一母岩終了30点写真報告。被燃あり。長さ21.6(5641g)の被燃石核出土。			青森県教育委員会2000『野木遺跡III』県281集
		第632号土坑	前期末葉(円筒下層d式)	フロースト出士坑内第5層(底面～底面直上)	軟質の細粒斑岩	单块					
大川系(1)遺跡	西目屋村	第2号堅穴住居跡	ビット5	土器底面縁	珪石は燧灰岩、土器底面縁	4点以上		土器片2点図示			青森県教育委員会2011『大川系(1)遺跡』県500集



深浦町津山遺跡 第57号土坑

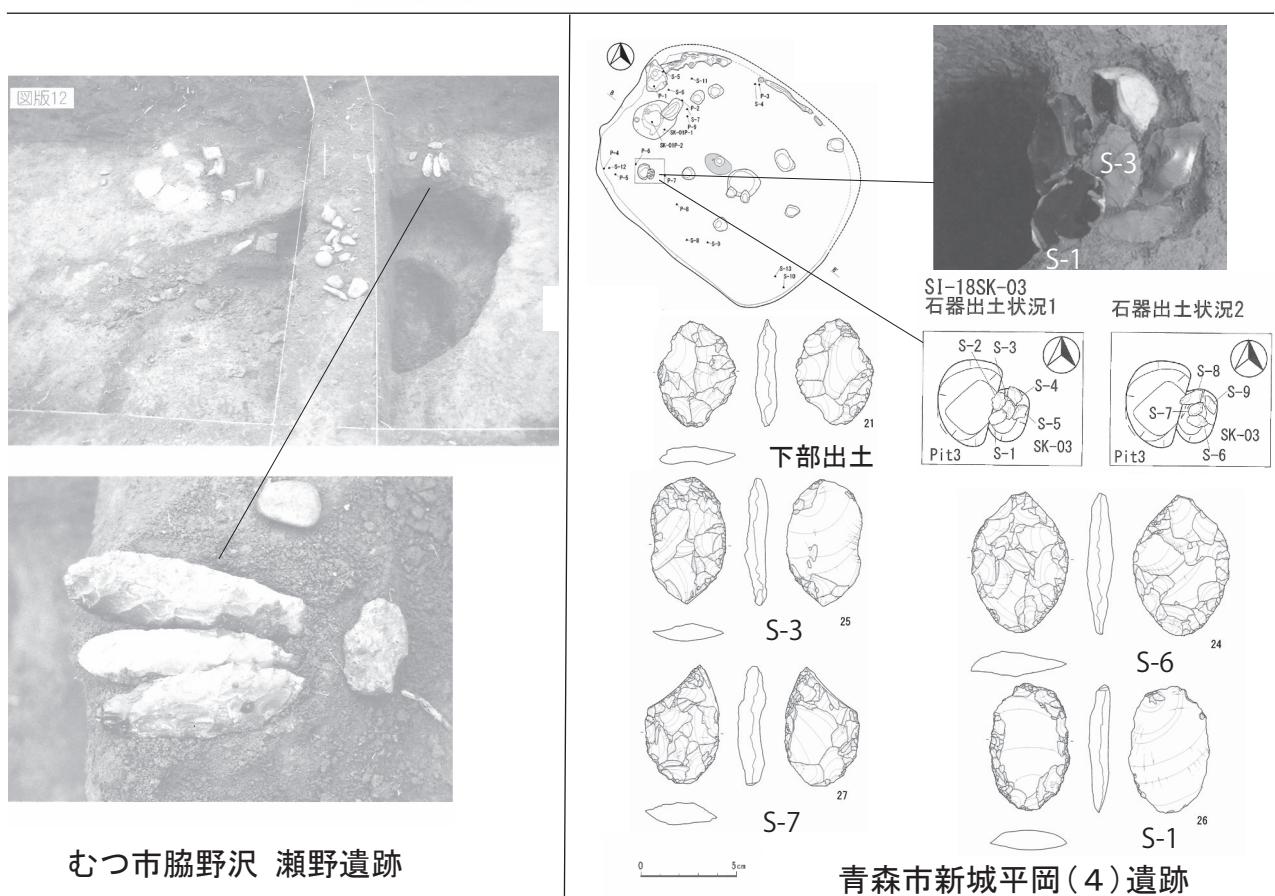


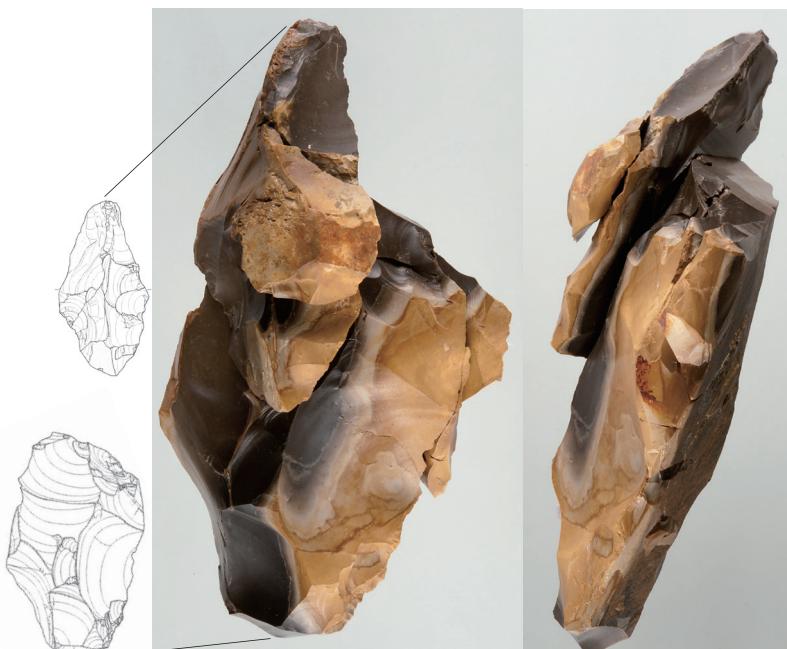
図2 両面調整石器の出土状況(津軽・下北地方)



B区 第82号土坑 底面の剥片集中



A区 第47号土坑 敲石・珪質頁岩原石ほか



B区遺構外 両面調整石器2点・剥片8点の接合品



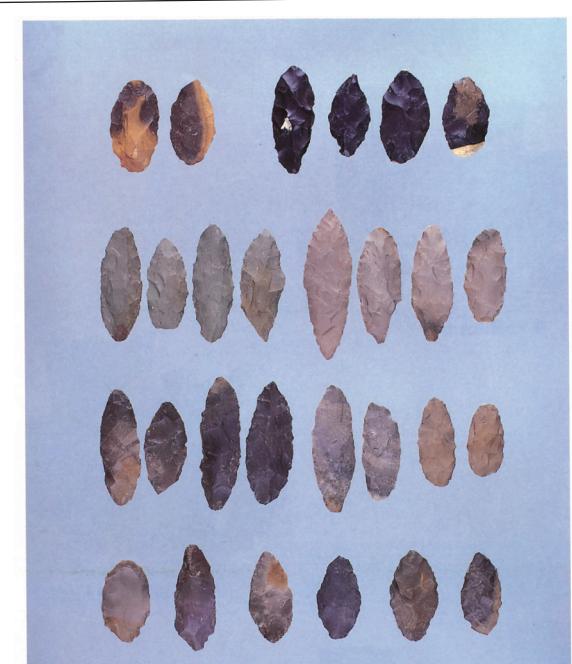
第11号礫・石器集中遺構



第12号礫・石器集中遺構

A区 第5号土坑最上部 石槍2点
蓬田村山田(2)遺跡出土品

六ヶ所村富ノ沢(3)遺跡出土石槍



三内丸山遺跡第6鉄塔地区第III層一括出土品

図3 山田(2)遺跡出土品と三内丸山遺跡等の石槍

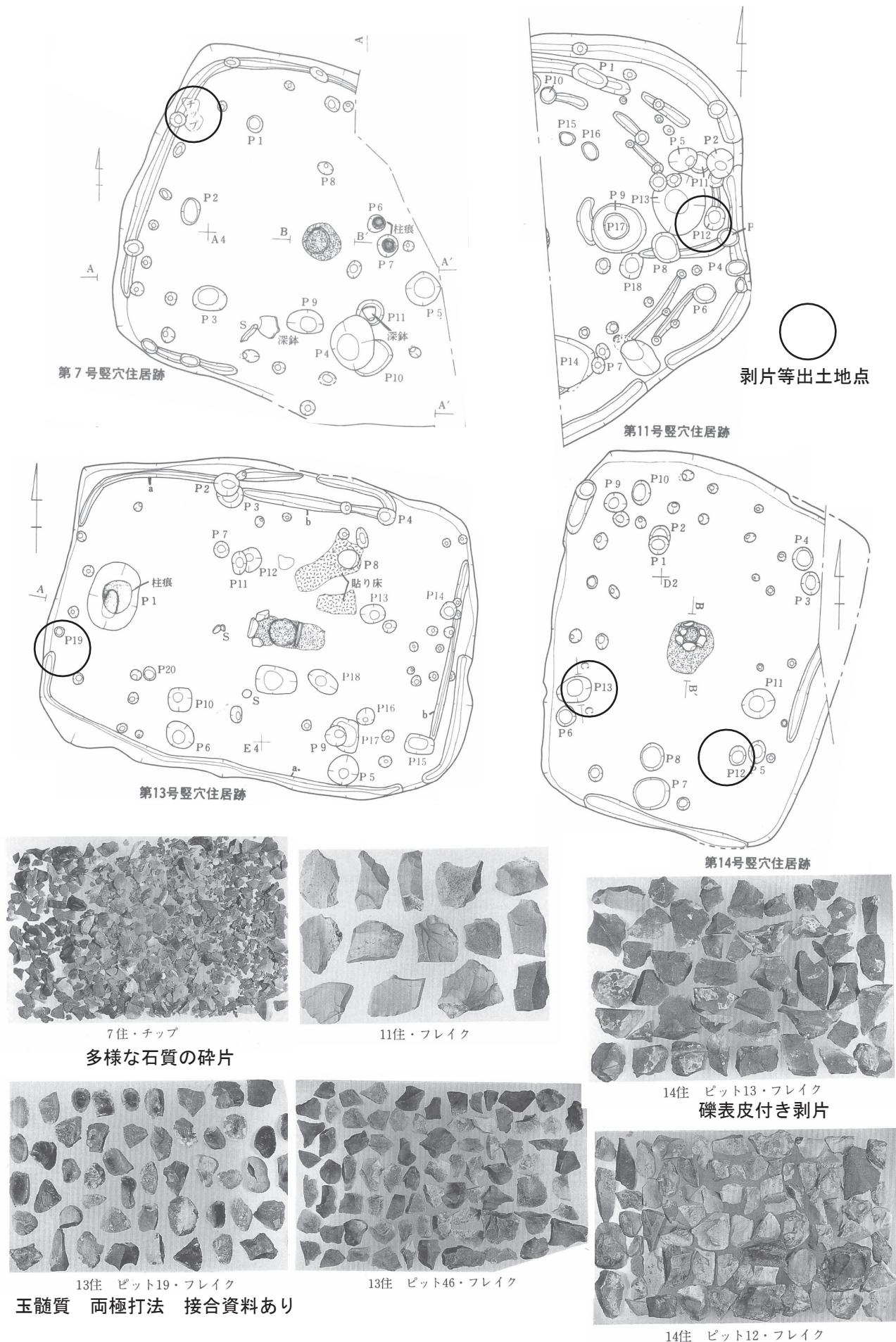
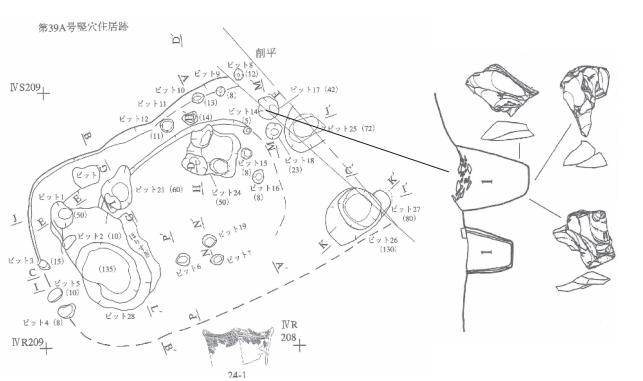
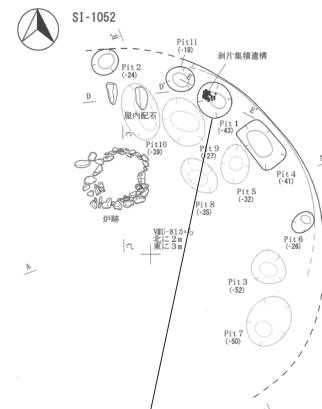


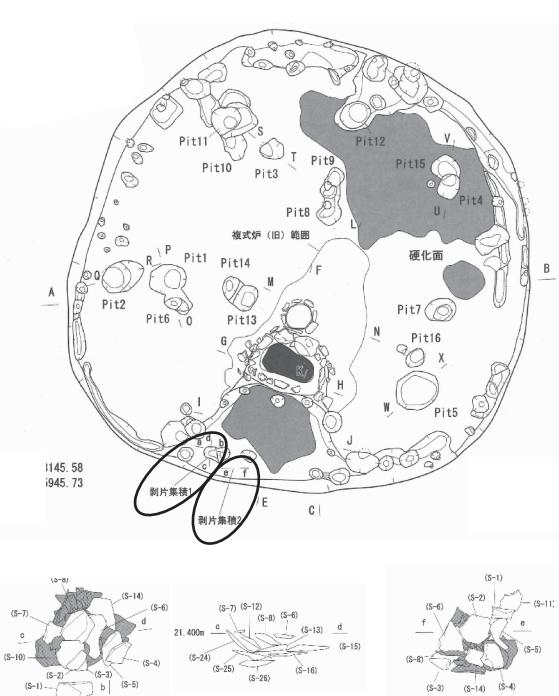
図4 八戸市松ヶ崎遺跡の竪穴建物内の剥片集中(縄文時代中期中葉)



三内丸山(6)遺跡第39A号竪穴住居跡

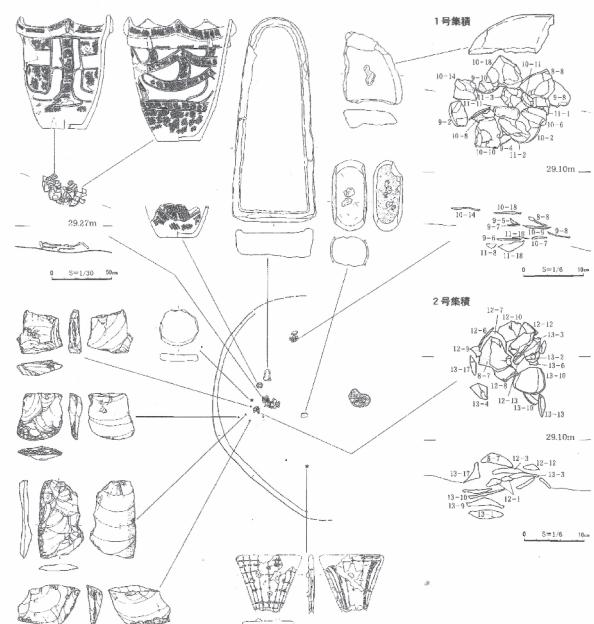


SI1052 pit1

SP936内 剥片集中
西目屋村水上(2)遺跡

剥片集積1(ピット内) 剥片集積2(ピット外)

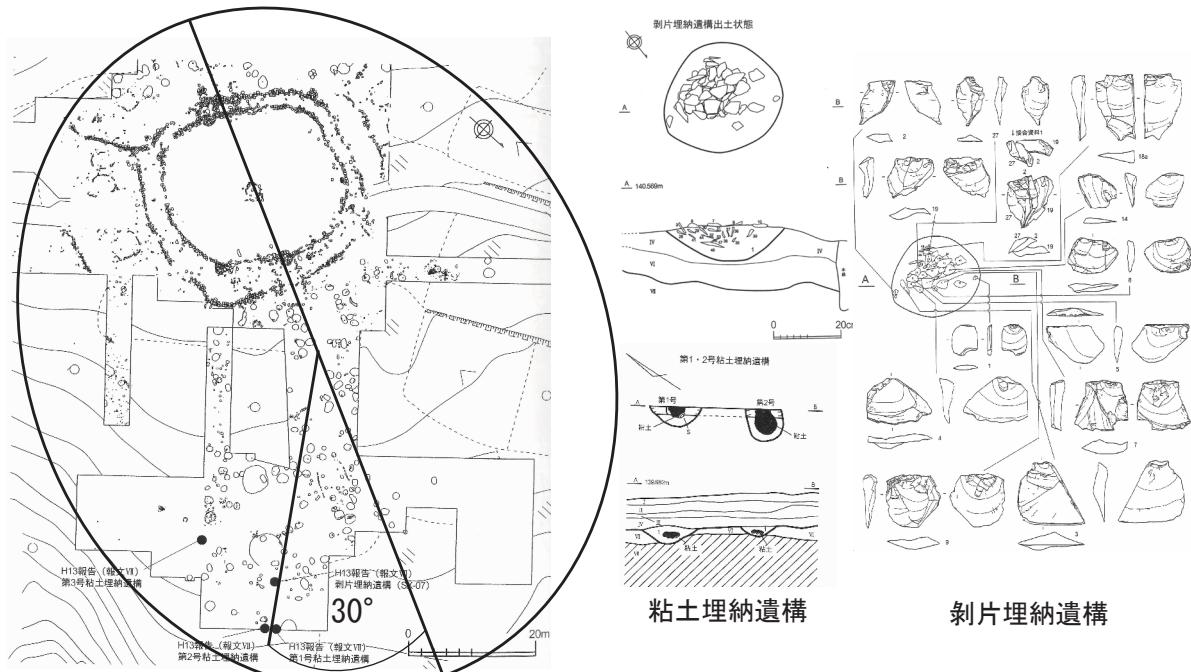
八戸市新田遺跡第11号竪穴住居跡



第26号竪穴住居跡

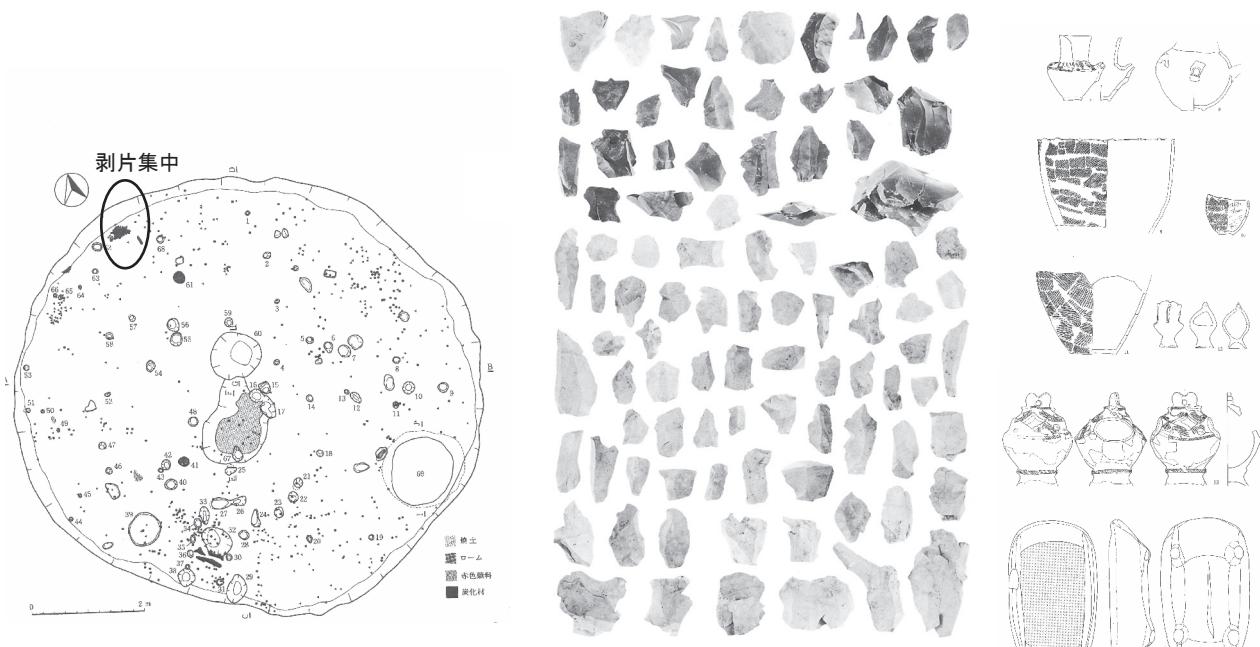
青森市安田(2)遺跡

図5 繩文時代中期中葉から後期初頭の竪穴建物跡出土例



The image displays two archaeological artifacts from the Komine Site in Aomori City. On the left is a dark, irregularly shaped block, possibly a fragment of a larger structure or a mold. On the right is a cylindrical, hollow ceramic vessel, likely a kiln or a mold, with a rough, textured surface. Next to it is a pile of dark, irregular fragments, possibly ceramic debris or ash.

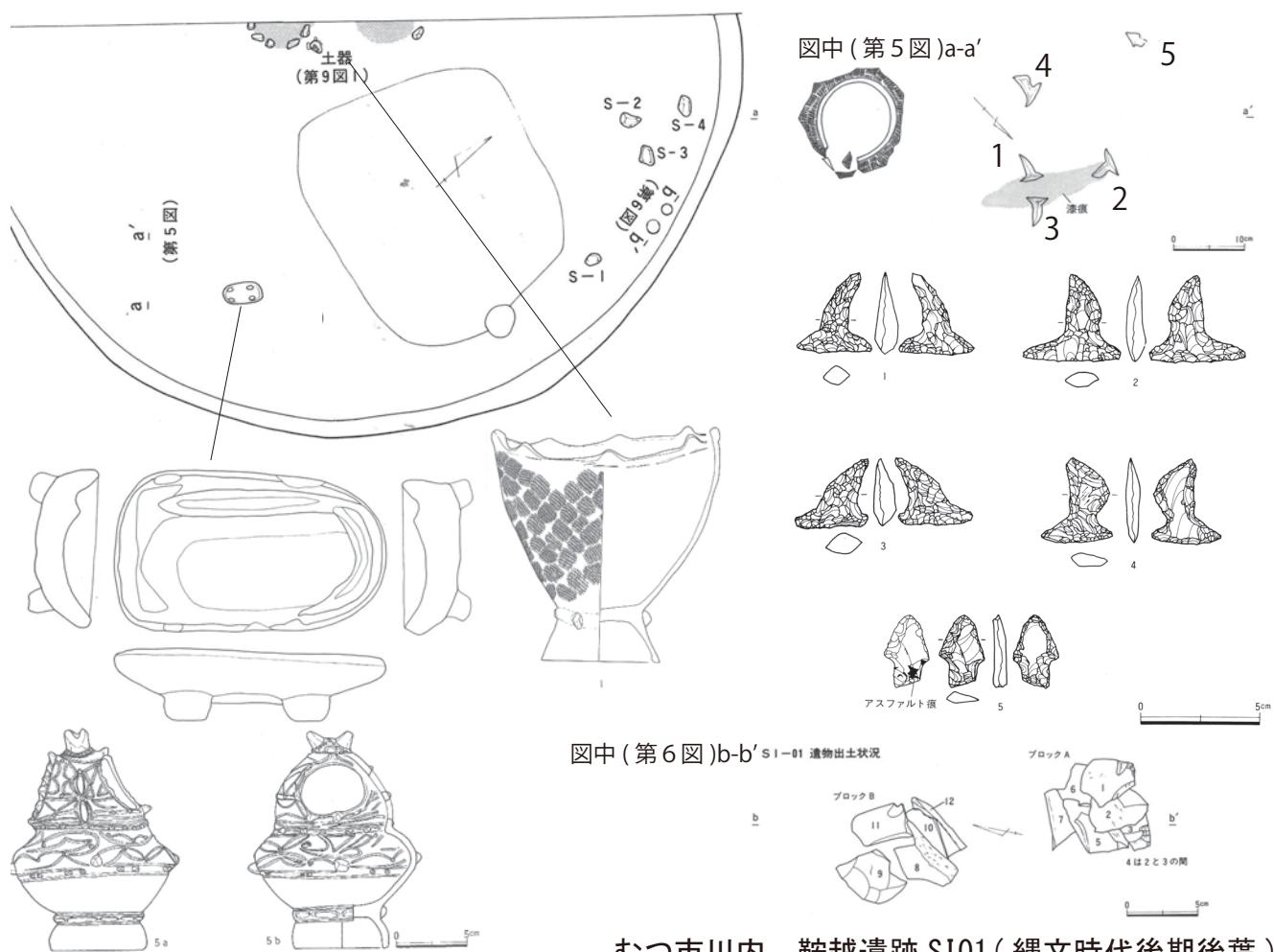
七戸町猪ノ鼻(1)遺跡 第36号住居跡 床面直上の黒曜石



第6号住居跡と床面出土遺物

外ヶ浜町 尻高(4)遺跡

図6 繩文時代後期前葉から後葉の剥片集中



むつ市川内 鞍越遺跡 SI01(縄文時代後期後葉)

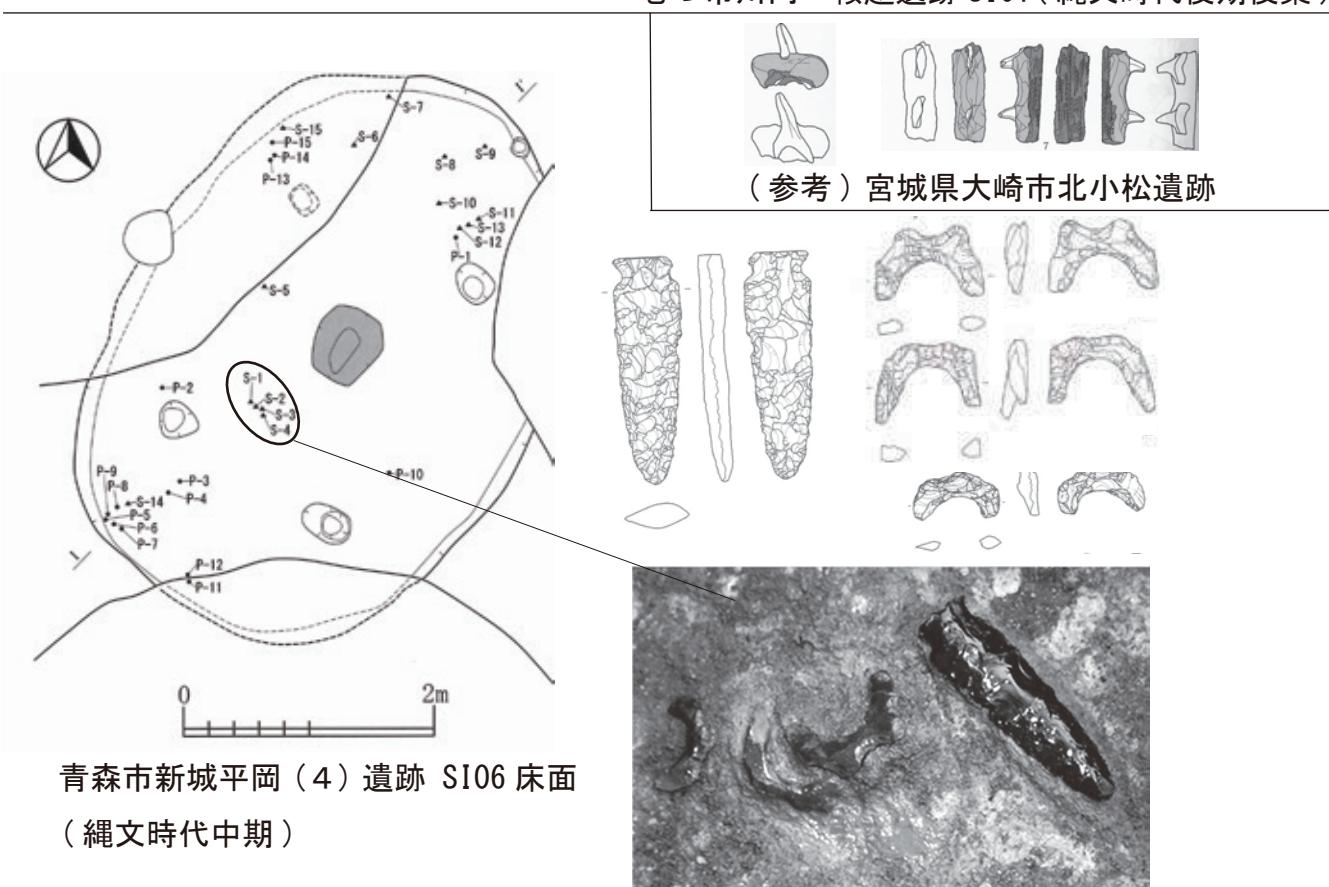
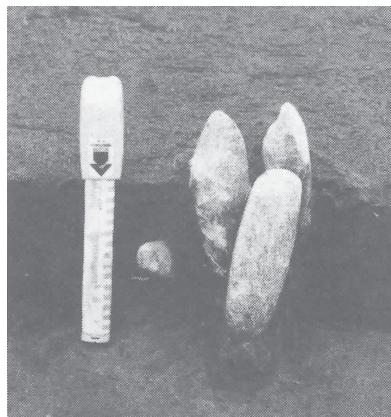
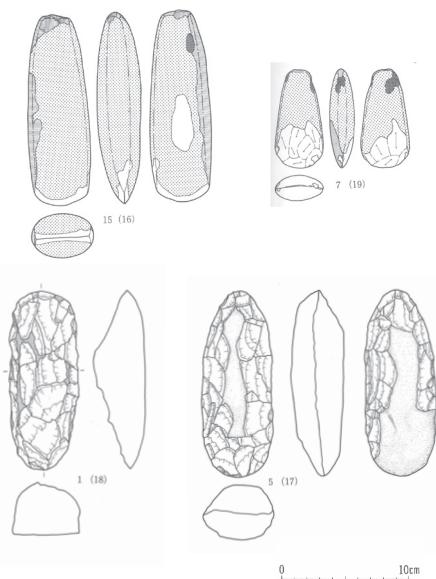


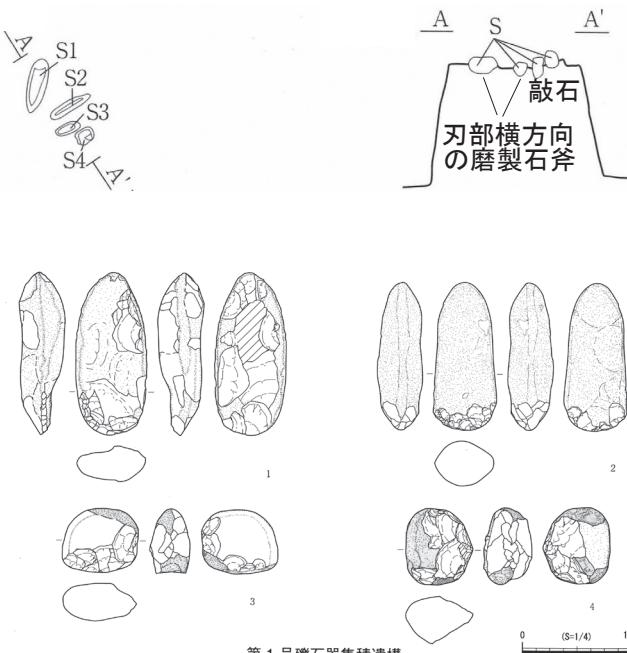
図7 異形石器の出土事例と関連資料



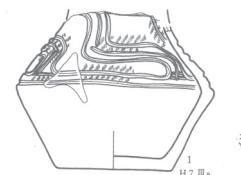
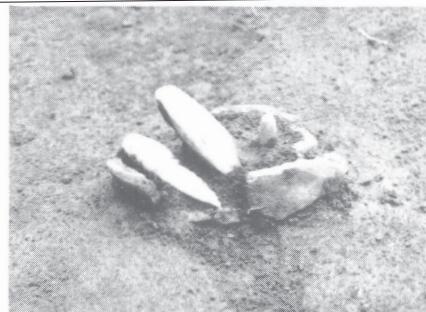
刃部上方向



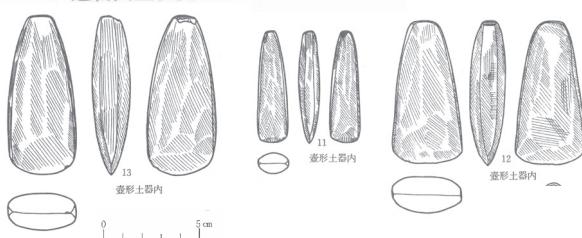
六ヶ所村上尾駒(2)遺跡



八戸市笛子(2)遺跡



遺物出土状況



八戸市笛子(3)遺跡



刃部斜め下方向



南部町館野遺跡

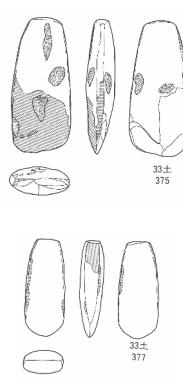
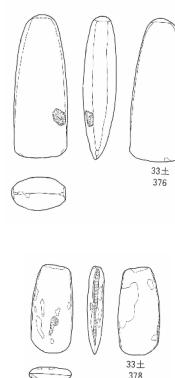


図8 六ヶ所村～八戸市周辺遺跡の磨製石斧 一括出土例

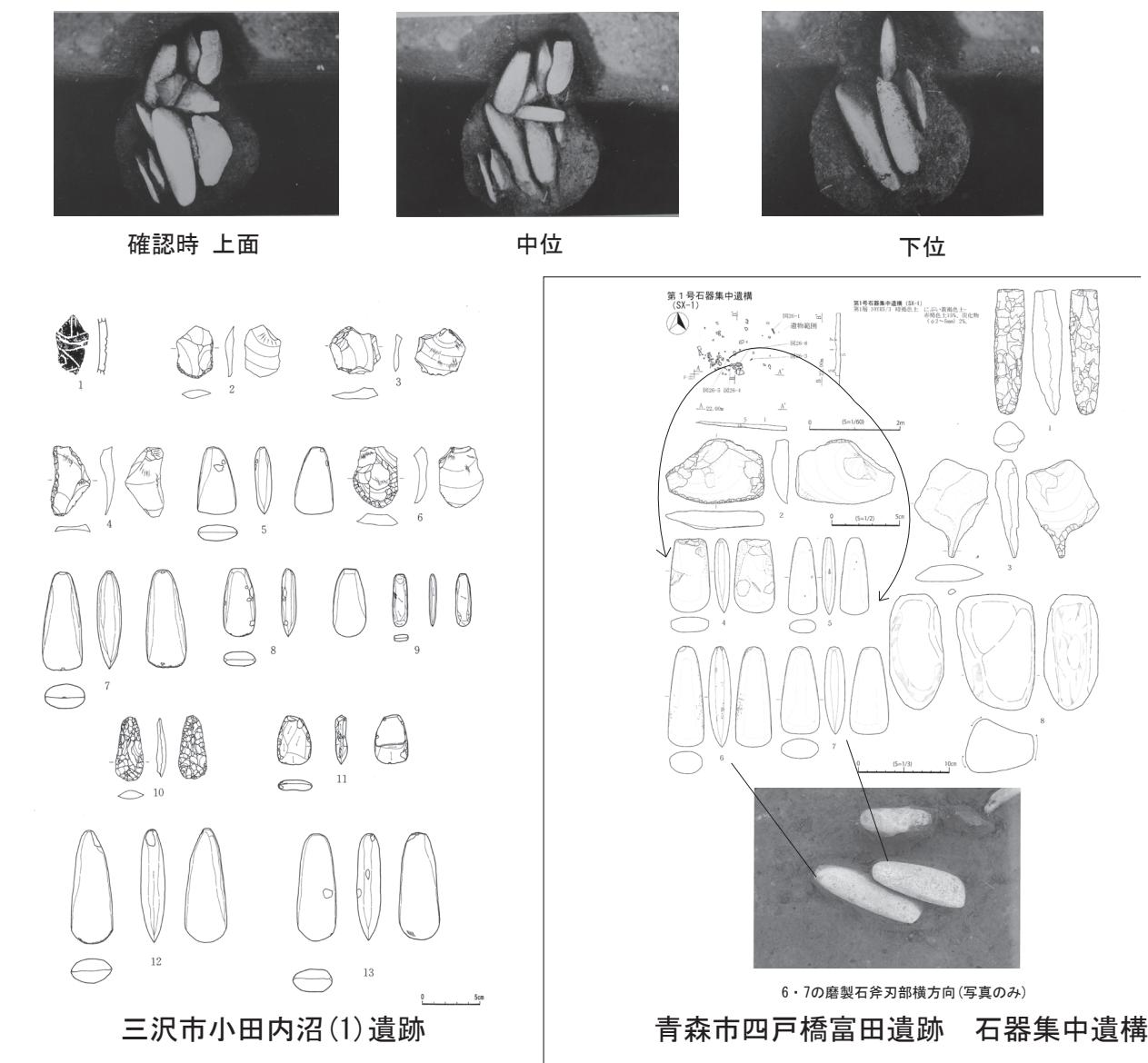


図9 完成品の磨製石斧・他の器種との共伴事例